

子ども時代の諸経験とナーチュランスの関係

上田 光浩¹ 新井 邦二郎²

本研究は、子育ての準備性ともいべきナーチュランスに対し、子ども時代のどのような経験が影響を与えているのかを検討することを目的とした。先行研究を参考に、子ども時代の経験として、8つの種類を取り上げた。①子どもの世話、②高齢者の世話、③けがや病気の人への世話、④障害を持つ人の世話⑤、虫や動物の世話、⑥植物の世話、⑦製作活動、⑧ままごとなどの遊びである。これらの経験を実際に行った直接経験と目で見えた間接経験の2つを設定し、またそれぞれの経験量と質（充実感、やりがいなど）を尋ねた。さらに、自分自身が受けた経験（家族・友達・先生）を加え、計9種類の経験を独立変数として、ナーチュランスを従属変数として検討した。これに加えて、過去の経験が共感性や向社会的行動を介在して、ナーチュランスに影響を与える可能性を検討した。主な結果は次のとおりである。①直接経験では、男子大学生において、子どもの世話経験の量と質が、虫・動物の世話経験の量が、ナーチュランスに正の有意な影響を与えていた。一方女子学生においては、子どもの世話経験の量と質が、製作活動の経験の質が正の有意な影響、他方、虫・動物の経験の質が負の有意な影響を与えていた。②間接経験では、男子学生において、子どもの世話経験の量と質のみが、ナーチュランスに正の有意な影響を与えていた。一方女子学生においては、子どもの世話経験の量と質のみがナーチュランスに正の有意な影響、また、けが・病気への世話経験の質が負の有意な影響を与えていた。③共感性と向社会的行動を媒介変数とした階層的重回帰分析をした結果、共感性と向社会的行動はナーチュランスの媒介変数として影響を与えていないことが明らかになった。

キーワード：ナーチュランス、過去の経験、共感性、向社会的行動、大学生

問題と目的

現代の母親は、大人になる前に子どもと遊んだり世話をするなどの接する経験が浅く、子育ての方法をほとんど知らないまま子育てをしなくてはならないという状況に立たされている（原田，2006）。子育ての方法を知らないというだけでなく、子育てに求められる多様な対象の発達を促す能力というように一般化して考えられている。日本では、Fogel, A.らの共同研究者である小嶋（1989）がナーチュランスを「相手の健全な発達を促進するための共感性と技能」と定義し、その対象となり得るのは、幼い子どもに限らず、一時的にでも救助・世話を必要としている存在一般であると提唱した。本研究でもナーチュランスをこのように用いていきたい。

様々な対象に向けられるナーチュランス行動に関係する研究として、幼児・児童を調査対象とする小嶋（1988）の研究が挙げられる。そこでは、多様な対象を想定し、年下のきょうだいや友達、お年寄り、身近な病人・けが人・障害のある人、疲れている親、ペッ

トなどの動物や育てている植物に対するナーチュランス行動の頻度を調査した。その結果、幼稚園・保育園年中組から、小学2年生、小学5年生へと学年が進むにつれ、弟妹や年少の子どもへの世話や一緒に遊ぶことは減少するが、お年寄りや身近な病人・けが人・障害のある人の世話、統計的には有意ではないもののやや増加すること、同様に動物や植物の世話も増加することが明らかになった。

蘆田（2010）は、ナーチュランスの発達や形成となるものの検討ではなく、多様な対象に向けられるナーチュランスの発現を検討した。親期と、親準備期の2群にわけてナーチュランス行動を比較すると、親期の方が親準備期よりも子ども以外の多様な対象に対して援助行動が発現することを明らかにした。しかし Fogel, Melson, Mistry, J.（1986）は、「人は友達やペットのような、赤ん坊以外の養育対象物への養護活動に携わることによって、赤ん坊を養育することを学べる」のではないだろうかと述べている。つまり、「子どもの世話以外の場面で獲得した一般的な養護能力は、小さい子どもと直に接する体験が与えられることにより、子どもの世話をすることに転移する」可能性があると考えられるのである。小嶋（2001）も、ナーチュランスは年下のきょうだいや友達、ペット、お年

1 東京成徳大学大学院

2 東京成徳大学

寄りとの遊びや世話など、様々な相手とのかかわりを通して、幼い頃から形成されていくと考えている。岩治(2009)は、青年期にあたる大学生における「養護性」の構成要因の検討と、養護性の発達に影響を与えるとされる要因としての愛着、社会的性役割観、きょうだいの有無、小さい子どもとの関わりや、世話経験について検討した。その結果、養護性の因子が明らかになった。社会的性役割観については、現代の性役割観が示された。愛着との関連では、男性においては現在の対人関係、女性においては就学前の母子関係が養護性と関連しやすいということが示され、また、幼い子どもとの接触経験や、保育に関する学習体験、これまでに出会った多くの人との関係が養護性を高める要因であること、さらに社会的性役割観のような、社会における文化的な要因が養護性の発達に影響を与えていることが示唆されたことが明らかとなった。

山内・松尾(2001)は、成人男性を対象に、男性の養護性の発達と育児機能との関連について検討した。その結果、父親の養護性は母親に比べて質的に差はあるものの決して低くないこと、その養護性のあり方は育児観や子どもの初期の養護的関心や構えにも強く影響していることが明らかとなった。また、男性の養護性は変化することが明らかになった。それは、加齢とともに、また親となることで育っていくばかりでなく、人の成長過程での社会化に影響を受け、幾つもの要因がかかわって形成されるものであった。

榎沢(2009)は、養護性形成の原因となる過去の体験の影響を検討した。それにより、女子は男子より養護性が高く、さらにきょうだいの地位では女子の場合に長子の「技能」が他のきょうだいの地位より有意傾向で高いということ。女子が男子より過去の体験の影響を受け、さらにきょうだいの立場により影響をうける体験の種類が異なること、その他きょうだい同士や教師との関わり、ペットの飼育体験も養護性に影響することが示唆されたことを明らかにした。

以上のような先行研究の検討を経て、子ども時代から今日までの様々な対象への経験が親になる前段階の青年男女の子どもへのナーチュランスに与える影響を明らかにすることを目的とする研究を行う。

本研究では、子ども時代から現在までの様々な対象への世話をする経験として6対象(子ども、高齢者、ケガや病気をした人、障害のある人、動物、植物)のほか、生き物以外の製作活動と、ままごとでの遊びを加えた8種類とした。8種類の経験各々について、それを実際に行った場合の直接経験と、目で見た場合の間接経験の2つを設定した。これらの直接経験と間接経験のいずれにおいても、その経験量とその質(やりがい・充実・興味)の2つを設けた。さらに、自分自身が世話を受けた経験を加え、計9種類の経験を設定し、それらが子どもへのナーチュランスに対し、どのよう

な影響を与えるのかを調べる事とした。

これに加えて、過去の経験が共感性や向社会的行動を介してナーチュランスに影響を与える可能性を検討する。向社会的行動の定義について、菊池(1988)は、見返りを期待しない人のためになる行動であり、分与行動、奉仕活動、寄付行動、支援・援助行動など自発性に基づいた行動を指すとした。共感性の定義について、角田(1991)は、能動的また想像的に他者の立場に自分を置くことで、自分とは異なる存在である他者の感情を体験することを意味するとした。本研究でも、これら定義を使用した。先行研究として、森下・小林(2014)は、動物の世話が、共感性と向社会的行動を高めていることを示唆した。このことから、過去の直接経験や間接経験などから直接ナーチュランスにつながるだけではなく、共感性や向社会的行動などを介しているのではないかと想定した。

方 法

1. 調査対象者と調査手続き

首都圏の大学生男女計217名を対象に調査を授業中に実施。配布前に調査の趣旨について説明し、任意の協力のもとに実施すると共に、回答拒否しても構わない旨、そしてデータのプライバシー保護には十分注意を払うことを伝えた。本研究は、平成26年5月に東京成徳大学院心理学研究科の研究倫理審査委員会において承認された(承認番号:14-1-1)。その後、質問用紙を受講者である大学生に配布。一斉に記入してもらい、配布した無記名自己記入式質問紙はその場で回収した。有効回答数は192(男性74名,女性118名)であった。

2. 調査時期

2014年6月から10月にかけて実施

3. 調査内容

①「過去の様々な対象への直接経験・間接経験の量と質」の質問紙

蘆田(2010)の研究を参考にして、質問項目を作成した。具体的には、下記の①～⑧の内容に対しての直接経験の量と質(各1項目計2項目)と間接経験の量と質(各1項目計2項目)をたずねた。①「子どもの世話経験の量と質」②「高齢者の世話経験の量と質」③「ケガや病気をした人の世話経験の量と質」④「障がいのある人の世話経験の量と質」⑤「動物の世話経験の量と質」⑥「植物の世話経験の量と質」⑦「製作活動の経験の量と質」⑧「ままごとなどの遊び経験の量と質」。尋ね方としては、例えば、⑤の動物の世話の量の直接経験では、「これまでに虫や動物(ペットを含む)の世話をしたことが、どのくらいありますか」と尋ねた。

また、⑤の動物の世話の量の間接経験では「家族や身近な人が虫や動物（ペットを含む）の世話をしているのを、あなたはこれまでにどのくらい見たことがありますか」と尋ねた。

そして上記の直接経験・間接経験の量に対して、それらの質としてそれぞれやりがいや充実感をどのくらい感じたのかを尋ねた。例えば、同じく⑤の動物経験では「これまでに虫や動物（ペットを含む）の世話をし、やりがい・充実感をどのくらい感じましたか」と尋ねた。回答はすべて、「たくさんある(5点)」～「ほとんどない(1点)」の5件法で求めた。

②「自分自身が世話を受けた経験の量と質」の質問紙
これまで、家族、先生、友達からどのくらい世話を受けたか(量)ならびに、どのくらいありがたいと思ったのか(質)について尋ねた。世話を受けた量と質の家族、先生、友達から受けた世話の量(各1項目)の計3項目と、世話の質、(各1項目)計3項目となる。世話を受けた量の回答は、「たくさん受けた(5点)」～「ほとんど受けなかった(1点)」の5件法で求めた。世話を受けた「ありがたさ」をたずねた回答は「とてもそう思う(5点)」～「そう思わない(1点)」の5件法で求めた。

③共感性尺度

小池(2003)が作成した共感性尺度の下位尺度の1つである「情動的共感性」7項目を使用。例えば、「沈み込んでいる不幸な人を見ると、つらい気持ちになる」などからなる。回答は「当てはまる」(5点)～「当てはまらない」(1点)の5件法で求めた。得点が高いほど共感性が高くなる。

④向社会的行動尺度

菊池(1988)の20項目からなる「向社会的行動尺度」のうち、「気持ちの悪くなった友人を、保健室に連れて行く」など大学生に適した9項目を選択して使用。回答は「いつもする」(5点)～「しない」(1点)の5件法で求めた。得点が高いほど向社会性行動を多くする。

⑤子どもへのナーチュランス尺度

中西・粟津(1997)の25項目からなる「養護性尺度」(大学生版)を使用。例えば、「自分は子どもを育て、いい親になろうと思っている」など、子どもへの興味や親準備性についての内容の質問からなる。回答は「とてもそう思う」(4点)～「そう思わない」(1点)の4件法で求めた。得点が高くなるほどナーチュランスが高くなる。

結 果

1. 各質問紙・尺度の記述統計量

本研究で用いた質問紙・尺度の平均とSD、性差をTable.1～4に示した。

いくつかの質問紙項目で女性が男性よりも高い得点

Table1 直接経験の記述統計量

質問紙(尺度)	満点	平均	SD	性差
直接経験				
①虫・動物(量)	5	3.82	1.224	n.s.
①虫・動物(質)	5	3.78	1.16	n.s.
②植物(量)	5	3.24	1.118	女>男***
②植物(質)	5	3.30	1.258	女>男*
③高齢者(量)	5	2.71	1.273	n.s.
③高齢者(質)	5	2.98	1.213	n.s.
④子ども(量)	5	3.64	1.274	n.s.
④子ども(質)	5	3.81	1.228	n.s.
⑤けが・病気(量)	5	2.74	1.212	n.s.
⑤けが・病気(質)	5	3.16	1.167	n.s.
⑥障害(量)	5	2.35	1.33	n.s.
⑥障害(質)	5	2.63	1.264	n.s.
⑦ままごと(量)	5	3.90	1.209	女>男***
⑦ままごと(質)	5	3.52	1.219	n.s.
⑧製作(量)	5	3.96	1.002	女>男*
⑧製作(質)	5	4.01	1.051	n.s.

p* < .05 *p* < .01 ****p* < .001

Table2 間接経験の記述統計量

質問紙(尺度)	満点	平均	SD	性差
間接経験				
①虫・動物(量)	5	4.10	1.116	n.s.
①虫・動物(質)	5	3.71	1.057	n.s.
②植物(量)	5	3.95	1.145	n.s.
②植物(質)	5	3.28	1.204	女>男*
③高齢者(量)	5	3.31	1.367	女>男*
③高齢者(質)	5	3.09	1.175	n.s.
④子ども(量)	5	3.90	1.171	n.s.
④子ども(質)	5	3.56	1.156	n.s.
⑤けが・病気(量)	5	3.47	1.223	女>男*
⑤けが・病気(質)	5	3.17	1.072	n.s.
⑥障害(量)	5	2.61	1.461	n.s.
⑥障害(質)	5	2.95	1.17	n.s.
⑦ままごと(量)	5	2.91	1.386	n.s.
⑦ままごと(質)	5	3.06	1.233	n.s.
⑧製作(量)	5	3.08	1.253	n.s.
⑧製作(質)	5	3.53	1.157	n.s.

p* < .05 *p* < .01 ****p* < .001

が見られているが、その逆は皆無であった。

2. 過去の直接経験(量×質)がナーチュランスに及ぼす影響

直接経験(量×質)の影響について、重回帰分析結果をFig.1と2に示す。Fig.1の男子学生では8つの要因のうち、子どもの世話経験のみが、ナーチュランスに正の有意な影響を与えていたことが見いだされた。Fig.2の女子学生においては、子どもの世話経験以外に、製作活動の経験が正の有意な影響を与えて、虫・動物の世話経験が負の有意な影響を与えていた。

Table3 世話を受けた経験の記述統計量

質問紙 (尺度)	満点	平均	SD	性差
世話を受けた経験				
①友達 (量)	5	4.08	1.045	女>男**
①友達 (質)	5	4.52	0.886	n.s.
②先生 (量)	5	4.11	1.045	n.s.
②先生 (質)	5	4.35	1.01	n.s.
③家族 (量)	5	4.51	0.856	n.s.
③家族 (質)	5	4.49	0.915	n.s.

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

Table4 共感性などの記述統計量

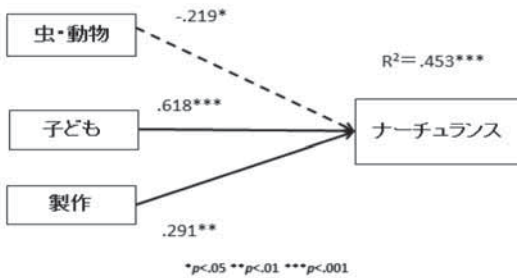
質問紙 (尺度)	満点	平均	SD	t 検定
共感性尺度	35	22.68	6.852	n.s.
向社会的行動尺度	45	30.3	9.14	n.s.
ナーチュランス尺度	100	72.6	15.4	n.s.

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$



*** $p < .001$

Fig.1 直接経験 (量×質)：男子学生の重回帰分析結果分析の結果



* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

Fig.2 直接経験 (量×質)：女子学生の重回帰分析結果分析の結果

3. 過去の間接経験が (量×質) がナーチュランスに及ぼす影響

間接経験 (量×質) の重回帰分析結果を Fig.3と4に示す。Fig.3の男子学生においては、8つの要因のうち、子どもの世話の目撃経験のみが、ナーチュランスに正の有意な影響を与えていた。Fig.4の女子学生においては、子どもの世話の目撃経験が、正の有意な影響を与えたが、他方、けが・病気の世話経験は負の有意な影響を与えていた。

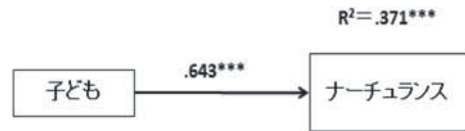
4. 過去の直接経験 (量) がナーチュランスに与える影響

直接経験 (量) の重回帰分析結果を Fig.5と6に示

す。Fig.5の男子学生においては、8つの要因のうち子どもの世話経験の量と虫・動物の世話経験の量がナーチュランスに正の有意な影響を与えていることが分かった。Fig.6の女子学生においては、子どもの世話経験の量、ままごと経験の量は正の有意な影響を与えていた。

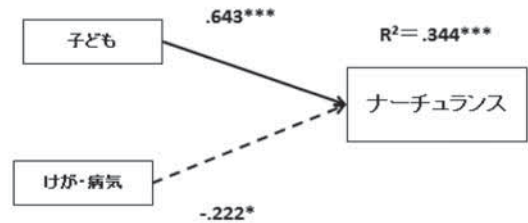
5. 過去の直接経験 (質) がナーチュランスに与える影響

直接経験 (質) の重回帰分析結果を Fig.7と8に示す。Fig.7の男子学生においては、8つの要因のうち子どもの世話充実感のみが、ナーチュランスに正の有意な影響を与えていた。Fig.8の女子学生においては、子どもの世話経験をする事への充実感と製作活動の充実感では正の有意な影響を与えていることが分かった。他方、虫・動物の世話経験の充実感では負の有意な



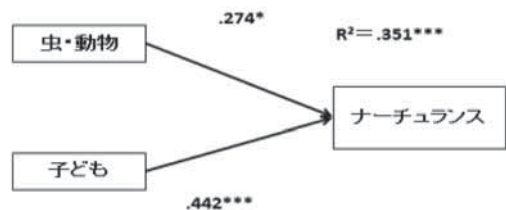
*** $p < .001$

Fig.3 間接経験 (量×質)：男子学生の重回帰分析結果分析の結果



* $p < .05$ *** $p < .001$

Fig.4 間接経験 (量×質)：女子学生の重回帰分析結果分析の結果



* $p < .05$ *** $p < .001$

Fig.5 直接経験 (量)：男子学生の重回帰分析結果分析の結果

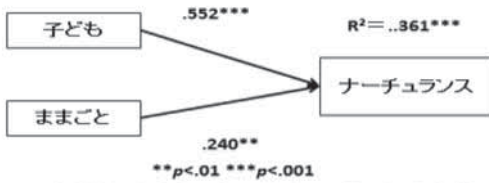


Fig.6 直接経験（量）：女子学生の重回帰分析結果分析の結果

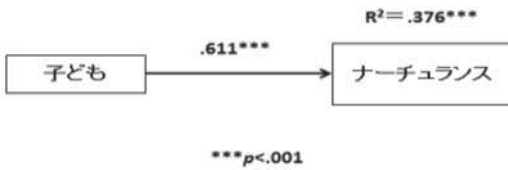


Fig.7 直接経験（質）：男子学生の重回帰分析結果分析の結果

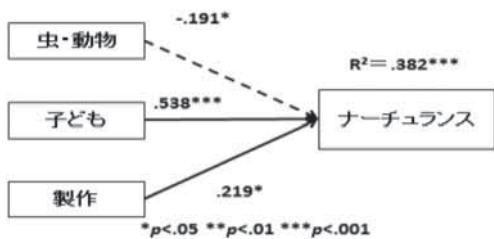


Fig.8 直接経験（質）：女子学生の重回帰分析結果分析の結果

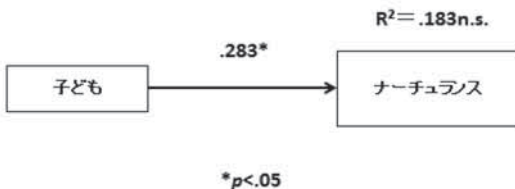


Fig.9 間接経験（量）：男子学生の重回帰分析結果分析の結果
影響を与えていた。

6. 過去の間接経験（量）がナーチュランスに与える影響

間接経験（量）の重回帰分析結果を、Fig.9と10に示す。Fig.9の男子学生においては、8つの要因のうち子どもの世話の目撃経験の量が、ナーチュランスに正の有意な影響を与えていることが分かった。Fig.10の女子学生においては、子どもの世話の目撃経験の量が、正の有意な影響を与えていた。

7. 過去の間接経験（質）がナーチュランスに与える影響

間接経験（質）の重回帰分析結果をFig.11,12に示す。Fig.11の男子学生においては、8つの要因のうち子どもの世話の目撃経験の充実感が、正の有意な影響を与

えていることがわかった。Fig.12の女子学生においては、子どもの世話の目撃経験の充実感が、正の有意な影響を与えており、他方、けが・病気の世話の目撃経験の充実感が、負の有意な影響を与えていた。

8. 過去の世話を受けた経験がナーチュランスに与える影響

過去の世話を受けた経験の量の重回帰分析の結果をFig.13と14に示す。Fig.13の男子および女子学生においては、家族からの世話を受けた経験の量のみが、ナーチュランスに正の有意な影響を与えていた。

世話を受けた経験の質の結果を Fig.15に示す。男子

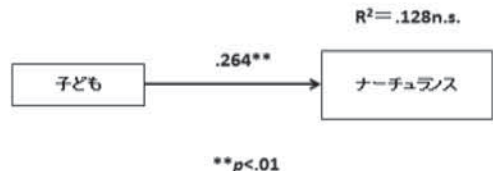


Fig.10 間接経験（量）：女子学生の重回帰分析結果分析の結果

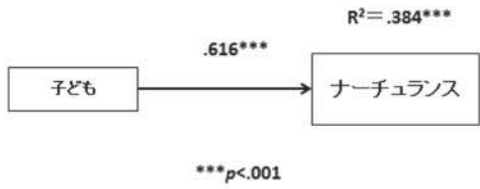


Fig.11 間接経験（質）：男子学生の重回帰分析結果分析の結果

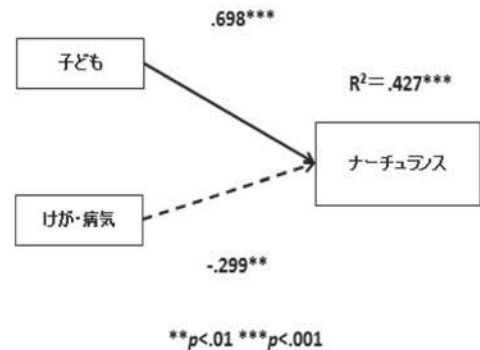


Fig.12 間接経験（質）：女子学生の重回帰分析結果分析の結果

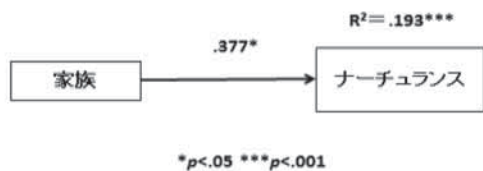


Fig.13 世話を受けた経験（量）：男子学生の重回帰分析結果分析の結果

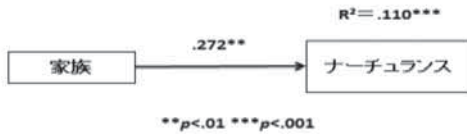


Fig.14 世話を受けた経験（量）：女子学生の重回帰分析結果分析の結果

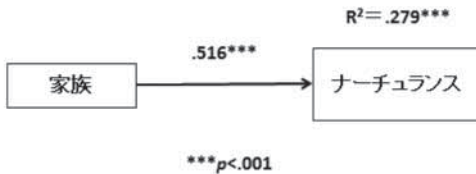


Fig.15 世話を受けた経験（量）：男子学生の重回帰分析結果分析の結果

学生においては、家族から受けた質のみが、ナーチュランスに正の有意な影響を与えていた。女子学生においては、いずれの世話経験も有意な影響を与えていなかった。

9. 直接経験（量×質）の共感性・向社会的行動を媒介としたナーチュランスへの影響

階層的重回帰分析を行い、Fig.16に男子、Fig.17に女子学生を示す。男子学生においては、8つの要因のうち、植物の世話経験のみが、共感性に正の有意な影響を与えた。が、向社会的行動に対しては、いずれの影響も与えていなかった。子どもの世話経験のみが、

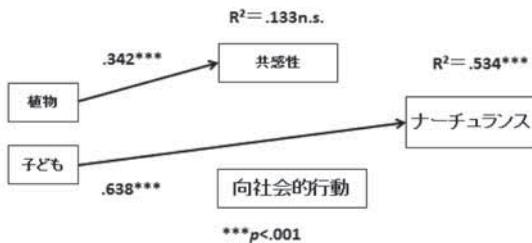


Fig.16 直接経験（量×質）：男子学生の階層的重回帰分析結果分析の結果

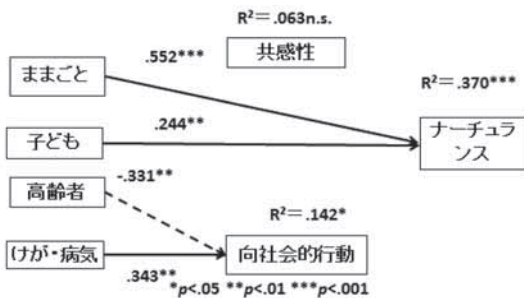


Fig.17 直接経験（量×質）：女子学生の階層的重回帰分析結果分析の結果

ナーチュランスに正の有意な影響を与えていたが、共感性や向社会的行動からの有意な影響は見られなかった。

他方、女子学生においては、8つの要因のうち、高齢者とけが・病気の人の世話経験は向社会的行動に有意な影響を与えていたが、共感性に対しては、いずれの要因も影響を与えていなかった。また、ままごとなどの遊びと子どもの世話経験はナーチュランスに正の有意な影響を与えていたが、共感性と向社会的行動からは有意な影響が見られなかった。

考 察

本研究の主な結果は以下の通り6つである。順次考察を行いながら見ていきたい。

- ①8つの過去の直接経験の要因のうち、量及び質を問わず一貫して子どもの世話経験がナーチュランスに正の有意な影響を与えていた。
- ②過去の間接経験においても、8つの要因のうち、子どもの世話の目撃経験が量及び質を問わず一貫してナーチュランスに正の有意な影響を与えていた。

当初はナーチュランスに影響する子ども時代の経験には、色々なものがあるだろうと先行研究により予想したが、以上の2つの主な結果から子どもの世話を実際に行ったり、目撃したりする経験が抜群にナーチュランスに影響を与えることを認識させられた。この中で、子どもの世話の直接経験だけでなく、それを見る間接経験もナーチュランスに影響を与えることがわかったことに注目したい。それゆえ、ナーチュランスを子ども時代から育てるためには、子育て場面を手伝うことはもとより、その場面を見ることだけでも有効な経験になると考えられる。

その他の興味ある結果は、以下の通りである。
③女子学生において、虫・動物の世話の直接経験の質がナーチュランスに負の有意な影響を与えていた。この結果を単純に理解するならば、虫や動物の世話に充実感を持つことは、ナーチュランスを抑制する傾向があるということになる。『堤中納言物語』に出てくる『虫愛ずる姫君』を連想させる結果であるが、これについての確かなことは今後の研究に待たなければならない。

④女子学生において、けが・病気の世話の間接経験の質がナーチュランスに負の有意な影響を与えていた。この結果を単純に理解すれば、けがや病気の世話を興味を持って目撃した経験が、ナーチュランスを抑制するということになる。このような関係になる理由についてはよくわからないが、けがや病気の人の世話をする人の大変さをそこに感じたのかもかもしれない。

⑤自分の受けた過去の世話経験においてナーチュランスに正の影響を与えたのは、家族からの世話のみで、友達や先生から受けた世話経験は影響を与えていな

かった。この結果と上記の①、②を総合すると、ナーチュランスは親子の関係を中心とする家族との関わりの中で形成されていく色彩が強いと思われる。

⑥共感性や向社会的行動が過去の経験とナーチュランスを繋げる媒介変数となっていなかった。この結果と、子どもの世話経験が共感性や向社会的行動に影響を与えなかった結果とを合わせて考えるならば、共感性や向社会的行動とナーチュランスとは、別の次元性にあると考えざるをえない。つまり、共感性や向社会的行動は普遍的、一般的な次元性のものであるのに対し、ナーチュランスは、親子関係を中心とする家族的次元性のものであると考えることが出来るのである。Fig.16の男子学生の共感性に影響する要因が植物の世話経験のみとなっていることや、Fig.17の女子学生の向社会的行動に影響する要因が高齢者の世話やけが・病気の世話の2つになっていることは、それら次元性の違いの観点から見ると理解しやすいものになる

今後の課題

質問紙の改善について今後の課題を考える。

過去の経験については「これまで～」と尋ねた。筆者の意図するところは、過去のすべてにおける経験を聞くことであつたが、調査協力者はどこからどこまでの期間かわからず、戸惑ったという声もあつた。したがって「これまでに」という曖昧な尋ね方ではなく、期間を明確に示した聞き方にすることを検討する必要がある。

製作活動については、家の中でプラモデルなどを作った経験を聞きたいと思っていたが、学校の授業(図画工作、美術や技術など)で製作活動を行うので、その区別がうまくできなかつた。これも区別する必要があると思われる。

文 献

- 蘆田智絵 (2010). 様々な対象に向けられるナーチュランスに関する研究 広島大学大学院教育研究科紀要 59, 41-50.
- Fogel, A. D, Melson, G. F., Mistry, J.(1986). Conceptualizing the determinants of nurturance : A Reassessment of Sex Differences. In A. Fogel & G. F. Melson (Eds) Origins of nurturance : Developmental, biological and cultural perspectives on caregiving (pp.53-67). Hillsdale, NJ : Lawrence Erlbaum Associates.
- 原田正文 (2006). 子育ての変貌と次世代育成支援 名古屋大学出版会
- 岩治まどか (2009). 大学生における養護性の検討 東京家政大学研究紀要 49, 133-142.
- 小池はるか (2003). 共感性尺度の再構性—場面想定法に特化した共感性尺度の作成— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 心理発達科学 50, 101-108
- 菊池章夫 (1988). 思いやりを科学する—向社会的行動と心理とスキル— 川島書店
- 小嶋秀夫 (1988). 乳児・児童における養護性発達に関する心理・生態学的研究 昭和62年度科学研究費補助金(一般研究C) 研究成果報告書
- 小嶋秀夫 (1989). 養護性の発達とその意味 小嶋秀夫(編) 乳幼児の社会的世界 (pp.187-204) 有斐閣
- 小嶋秀夫 (2001). 心の育ちと文化 有斐閣
- 棚沢令子 (2009). 大学生における過去の被養護・養護体験が現在の養護性 (nurturance) へ及ぼす影響 教育心理学研究 57, 168-179.
- 尾形奈美・大塚由希・吉田真弓 (1999). 育児準備性に関する日米比較研究—青年期男女の育児意識とその規程要因 家庭教育研究所紀要 21, 96-105.
- 山内ひろみ・松尾祐作 (2001). 男性の養護性の発達に関する研究 福岡教育大学紀要 50, 247-253.

—2015. 1. 30受稿, 2015. 3. 7受理—

The relation of the experiences of childhood and youth between nurturance to a child

Mitsuhiro UEDA (*Graduate School of Psychology Tokyo Seitoku University*)

Kunijiro ARAI (*Tokyo Seitoku University*)

The object for this research was to consider what kind of experiences influence the way people provide nurturance while raising their own children. In my research I consider eight types of experience studies to reference, related to past experience, and took up the eight types. ① Child care, ② care of the elderly, ③ care of injured or ill people, ④ care of handicapped people, ⑤ care of insects and animals, ⑥ care of plants, ⑦ production activities, ⑧ playing house. I asked about first hand and observed experiences, established also the respective experience quantity and the quality (sense of fulfillment and worth doing) and of those experiences. In addition to this, possibility that past experiences affects nurturance interposed by the empathy and prosocial behavior has been investigated.

The Main results were as follows. (1) in male college students' first hand experiences, the quantity and quality of child care experience and the amount of care experience of insects and animals had a significantly positive affect on nurturance. With female student', the quantity and quality of child care experience and the quality of my production activity experience also had a significantly positive effect, on the other hand, the quantity of insects and animals experience had significantly negative affect on nurturance. (2) In indirect, in male students, observed experience only the quantity and quality of child care experience had a significantly positive affect on nurturance. In the female student, only the quantity and quality of child care experience had a significantly positive impact nurturance. Also, the quality of the care given to the infirm a significant negative impact. (3) As a result of the hierarchical multiple regression analysis and parameter of empathy and prosocial behavior, empathy and prosocial behavior were found to not affect the parameter of nurturance.

Key words: nurturance, past experience, empathy, prosocial behavior, college student

Bulletin of Clinical Psychology, Tokyo Seitoku University
2015, Vol. 15, pp.103-110